

マリア



著者プロフィール

チコママ&ぺろまま

ワンコ友達を通じて知り合った二人です。

ブログ、書籍出版、作品展、絵本の発行など

其々で活動してきましたが

「全てのワンコを幸せにしたい」という

想いが同じことから一緒に作品を作る事になりました。

作中では文をチコママが、イラストをぺろままが

担当しております。

これからも沢山の作品を通して

みなさんと一緒に

「犬と共に生きること」について考え

「犬の命の尊さ」を発信していきたいと思っております。

■文■

チコママ

ブログ「柴犬のチコ。」にて8年間、愛犬チコとの生活を綴ってました。

2014年4月、チコが旅立った後も心は共に。

現在はペット情報サイトPECOにて公式ブログを運営。

全てのワンコ達の幸せを願い、日々更新しております。

ブログ

[「柴犬のチコ。」](#)

[「PECOいぬ部 Byチコママ」](#)

■イラスト■

ぺろまま

何気なくブログをきっかけに「殺処分」の現実を知って以来

独学でイラストを勉強し、優しい言葉とイラストで

「子どもでも見れる殺処分問題」をテーマに殺処分の現実を訴える活動を続けています。

2017年3月 一般社団法人KunKunを設立。

迷子犬を減らすための[「迷子から家族を守ろう」カード](#)の制作や、

子どもたちへの命の啓発活動を行っています。

HP: [一般社団法人 KunKun](#)

代表ブログ: [心がほっこりするブログ](#)

スタッフブログ： [KunKunのブログー動物と人に希望の光を一](#)

■はじめに■

みなさんは「野犬」というと、どんな犬を想像しますか？
山奥などで群れて逞しく生きている、どちらかという「怖い」イメージを
持たれているのではないのでしょうか。

そもそも日本に「野生の犬」なんて存在しません。
飼い主に捨てられた等、何らかの理由で家に帰る事ができなかった犬達の末裔が
野犬なのです。

彼らの毎日は常に、生と死が隣り合わせです。

明日は食事がとれないかもしれない。

飲む水がないかもしれない。

そして何よりも恐れる「人間」に捕獲され、殺されるかもしれない。

必死に姿を隠し、ひたすら存在を消して、懸命に生きる毎日。

その過酷な毎日を支えているのは全ての動物が持つ「生きたい」という想い

そして、仲間や我が子の存在なのかもしれません。

これからご紹介するのは、福岡の都会の真ん中で怯えながら暮らしていた
一匹の野犬のお話です。

その子は過酷な環境の中で8年間も自力で生き抜き

沢山の子孫を残したことから「マリア」と名付けられました。

聖母、マリアです。

マリアは、残念ながらこの世にはもういません。

でも、その子孫達は今でも「家庭犬」として幸せに暮らしています。

沢山の子供を産み、立派に気高く生き抜いた「マリア」の話。

そして、マリアを救いたいと奮闘した人間の話。

どうか聞いて下さい。



もくじ

- 野犬たちの命を守るために。そして運命の出会い。
- はじまった、マリアとの生活
- マリアの変化
- どこから、来たの
- 新しい犬舎
- 一進一退
- 焦る、気持ち
- 脱走の危機
- 8年間を埋めるように
- 旅立ち
- マリアとの約束
- マリアが残してくれたもの
- おわりに

野犬たちの命を守るために。そして運命の出会い。

■野犬たちの命を守るために。そして運命の出会い■

福岡の、住宅や商業施設が並ぶ都会の片隅でひっそりと生きている犬達の群れがいる。

保健所の捕獲、交通事故、人間からの虐待、そして最も恐れる飢え……。それらと常に隣り合わせの中、必死に生きている犬達。

餌を探すため、車やバイクがヒュンヒュン走る道を平然と渡る姿に何度ハラハラしたことが。

放っておけば、かなりの確率で命を落としてしまうであろう犬達。なんとか救いたくて、私は有志達と共にレスキューを始めた。

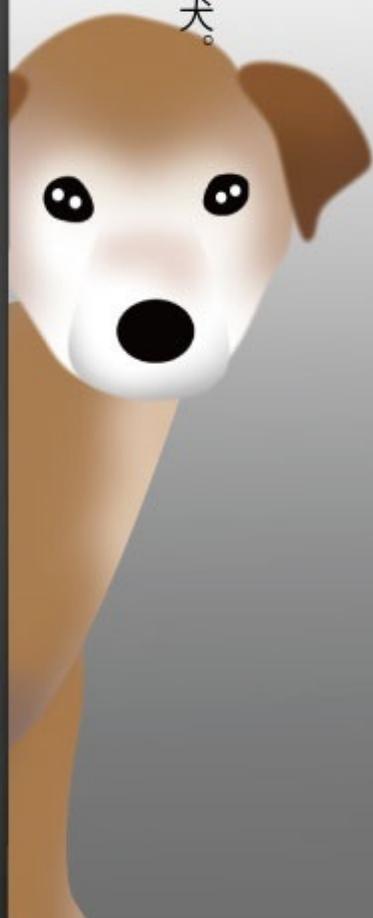
子犬は、人間を警戒する月齢になる前に、すでに警戒心の強い母犬は、何度も餌付けを繰り返し長い時間をかけていった。

一年あまりで救えたのは、4匹の母犬と、33匹の子供たち。その殆どが、今は里親さんの元で幸せに暮らしている。

全頭保護を目指して活動を続けていく中で私は、ある一匹の犬の存在を知る。

群れの中でも特に警戒心が強く他の子達が寄ってくる餌付けの場所にも、私がその母犬の姿を見たのは、一度だけ。殆ど顔を出さない母犬。

そしてコロコロとした子犬達からは想像つかないほど痩せ細ったその姿が、ずっと脳裏から離れなかった。



あなたも絶対に幸せにするから・・・。
そう心に誓って半年以上が過ぎた頃
私の願いは、やっと叶った。

夢にまで見た、あの母犬の保護。

たくさんの子犬を産み、命がけで育ててきた事への敬意をこめ
私はその犬を「マリア」と名付けた。
聖母、マリアだ。

これでもう、この子は「死と隣り合わせ」の恐怖を感じる事はない。
飢える心配だつてない。

夜は温かなベッドで安心して眠ることができる！

これからのマリアの人生を想い、私の心は躍った。
嬉しくて、涙がポロポロこぼれた。

でも。実際に始まったのは

「生粋の野犬マリア」と私の闘いの日々だった・・・。



■はじまった、マリアとの生活■

その後の調査で、マリアはなんと8年もの間、野良として過ごしていた事が分かった。目の前で、何度も子供達を奪われた悲しみからかマリアの心は完全に「人間」を遮断していた。

警戒心の塊のようなマリアのため私は逃走の事故が起こらない様、頑丈なケージを用意し、その中には身を隠すための小屋を入れた。

マリアは早速、その小屋の奥に引きこもり体を固くしてこちらを睨んでいたけど・・・それでいい。これでもうこの子は危険な目に遭う事はない。私はそれだけで満足だった。

その夜。

私の耳に、マリアの大きな叫び声が届いた。慌てて犬舎に駆け付けると、そこには・・・

口元を血で染め、荒い息をしているマリアの姿。そして、彼女の歯型が沢山ついた、犬舎の檻。

脱走を、試みたのだ。

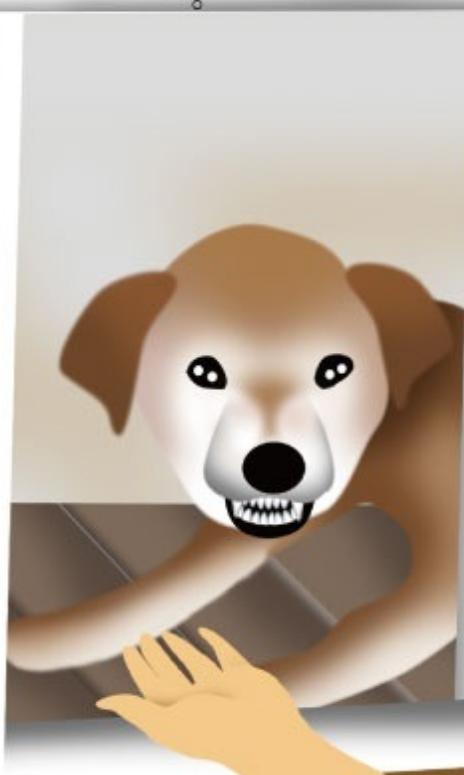
その光景を見た瞬間、私はマリアの心の傷が想像よりもはるかに深い事を悟った。

マリアのこの行動は、それから毎晩続いた。

夜中、マリアが「ここから出せ！」と騒ぎ出すたびに、犬舎に走って必死に宥める日々。

私がどんな言葉をかけてもマリアは犬舎の柵を噛むことを止めなかった。自分の歯が折れ、口の中の肉片が飛び散っても。

泣き叫びながら大暴れするマリアと共に私は眠れない夜を何夜もすごした。



一カ月もすると、マリアは犬舎からの脱走を試みなくなった。
あの大暴れがウソのように、落ち着いて過ごしている。

これで、飛び散った血や肉片を見なくて済む。

夜もゆっくりに眠れる・・・。

でも、それ以上に嬉しかったのは

マリアにとって犬舎が「恐ろしいところ」ではなく

安心できる空間になった事。

8年もの間、ひと時も気を抜くことなく生きてきたマリアが

「安心して過ごせる場所」を手に入れてくれたことが

何よりも嬉しかった。

未だ、人間に対しては警戒心丸出しで

私の顔を見ると小屋の奥に隠れてしまうマリアだけど

それでいい、ゆっくりに進めばいい。

先は長いんだもの。

私と一緒に、ゆっくりに進んでいこうね。



■マリアの変化■

命がけの脱走をやめた頃から、マリアの顔が優しくなった気がする。

人の気配を感じると、相変わらず小屋に隠れてしまうけど
手の平に乗せたフードを見せると、そお・っ顔だけ出して食べてくれる。
いつでも逃げられる様に、後ろ足は必ず小屋に残していたし

尻尾も下がったままだけど。

それでも自らフードに近寄れるようになったのは
すごく大きな進歩だと思う。

フードにそおっつと近寄り
一粒一粒を、大事そうに丁寧に噛んで食べるマリア。
なんて、可愛いんだろう。

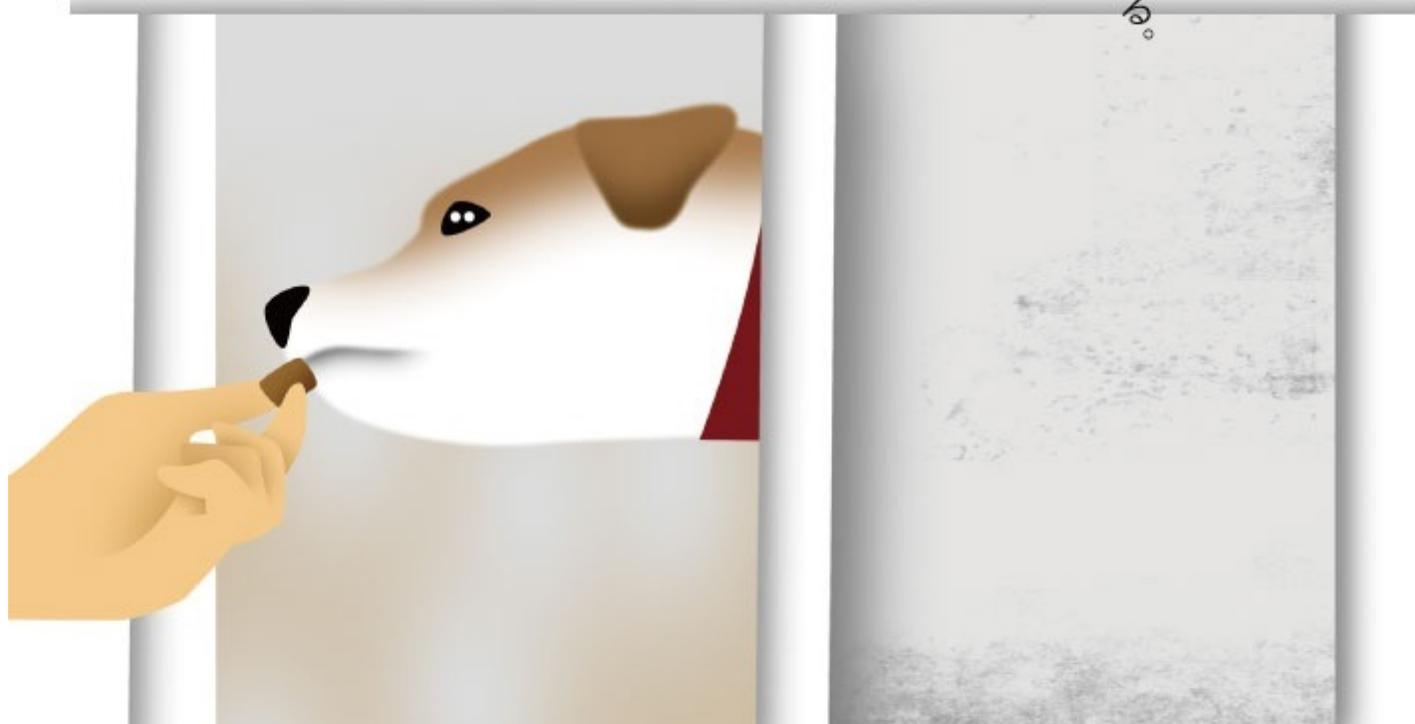
この子は、こんなふうにして命を繋げてきたのだろうかと思像すると
健気で愛おしくて、たまらなかった。

本当はあと一步、勇気を出して
小屋から出てきて欲しいけど

自分の歯を折ってまで脱走しようとしたマリアが
こんなふうには、ゆっくり落ち着いて過ごしてくれる様になっただけで
今は、じゅうぶん。

無理はさせたくない。

マリアのペースに合わせた亀さん歩きでいこうと思う。



どこから、来たの

■どこから、来たの■

考えても仕方のない事だけど、ついつい思ってしまう。マリアは何故、あの場所で「野犬」として暮らす事になったのだろうか。元々、人に飼われていた子なのか。それとも野良の母犬が、あそこで産んだ子なのか……。

どちらにしろ、マリアの過酷な8年間をうんだのは人間の「命」に対する無責任な行動だ。

「たかが犬」という軽い気持ちで捨てたのかもしれない。「何とか生きていくだろ」と、迷子になった子を探さなかったのかも。

その、本人にとっては何気ないと行動と軽い考えが、たくさんの「野犬」をつくり、悲劇を生んでしまっている。

犬を無責任に捨てる、その罪の深さを知って欲しい。

こんなにも可愛い子達を苦しめ
時には死に追いやっていることを、
知って欲しいと思う。



■新しい犬舎

マリアに更に快適な居住スペースをプレゼントしたくて、今までより大きく広い犬舎を新たに作った。

晴れの引越しの日。

ウキウキな私とは裏腹に、マリアは古い犬舎に引きこもって出てこない。

どんなに宥めても出てくる気配がないので

最後は強引に引きずり出してのお引越になってしまい

マリアは少し、ふて腐れちゃったけど

お詫びにオヤツをあげると、いつもみたいに優しく受け取ってくれた。

マリア、新しいお家はどうか？

ここだと少しは自由に歩き回れるよ。

小屋にはたくさんさんの毛布を入れておいたからね。

きつと夜も、ポカポカだよ。

最近のマリアは、私が犬舎に入っても怯えることなく

落ち着いて過ごせるようになっていた。

柵越しではない、直接触れられる距離で寛ぎながら、ゆっくりオヤツも食べてくれる。

その姿が、涙が出るほど嬉しかった。

私とマリアの距離は、亀さん歩きの様にゆっくりだけど

確実に縮まってきている。

尻尾を振りながら小屋から出て来てくれる日も近いかも！

そうしたらマリア、一緒にお散歩に行こうね。

お外の世界を、一緒に思いきり楽しもう。

・・・なんてワクワクした、引越しの夜。

新しい場所が急に不安になったのか

徐々にマリアが大騒ぎを始めた。



でもそれは、保護した当初のあの
「歯を折りながらの大暴れ」の興奮とは
明らかに違っていて。

何度かマリアの様子を見に行き、宥めた後
昼間の疲れもあって私は眠ってしまった。
マリアも落ち着いたので、やがて静かになった。

ピカピカの新居の中、温かい毛布に包まって
良い夢を見てくれたかな・・・。



■一進一退■

私の姿を見るとマリアは

小屋の中で立ち上がって出迎えてくれるようになった。

きっとオヤツやご飯を期待しての歓迎だけど

大きな進歩だと思う。

もう少し経てば、次のステップに進めるかもしれない。

・・・と、そんな期待を抱いた数日後には

私を見ると小屋の奥に隠れたりする事もあって。

マリアと私の距離は、本当に一進一退の繰り返し。

生粋の野犬だったマリアを保護して数か月。

この成長のスピードが早いのか遅いのか、

私には分からない。

でもマリアにはマリアのペースがあって

焦ったり、強引に進めてはいけけないと思っている。

少しずつでいい。

一緒に頑張ろうね、マリア。



■焦る、気持ち■

今まで辛い生活をおくってきた分
これからは思いきり幸せにしたい。
楽しい経験をさせてあげたい。

そう願う私の気持ちとは裏腹に、保護から半年を過ぎても
マリアは散歩に行くことが出来なかった。

それどころか、リードに私の手が触れただけで
ブルブル震え出してしまふ。

尻尾だって、一度も振ってくれた事がない。

はやく、お散歩に連れ出してあげたいよ。

病院でヘルスチェックも受けさせてあげたい。

マリアの、喜ぶ顔がみたい……。

あのまま野良生活を送っていれば、消えていたかもしれない命。

今はもう、死と隣り合わせの生活に怯えなくていい。

寒い想いも、ひもじい想いもしなくて済む。

それでも、どうしても考えてしまふ。

「保護して、本当に良かったのか」

「マリアは私という、幸せなのか」と。

震えるあなたを見ると、考えてしまふ。



■脱走の危機

マリアとの生活を始めて、一番気を使ったのは「脱走」だった。人への警戒心が強いマリア。「人の手による保護」は、ほぼ期待できない彼女の脱走はイコール、私との永遠の別れと言っても過言ではない。

私は迷子札の装着はもちろん、穴を掘って脱出できそうな場所はコンクリートで埋めてからブロックを敷き詰め、犬舎は飛び越えられない高さのフェンスで囲み、それでも万が一の事を考え、マリアをワイヤーで繋留した。これで安心。
大事なマリアを危険な目に遭わせる事はない。

・・・そう思っていたのに。
ある日、マリアは頑丈なはずのワイヤーを噛み千切ってしまった。

私とその知らせを受けたのは、仕事の外出先。
家には家族がいたものの、マリアに近寄れるはずもなく・・・。

ワイヤーが外れ、犬舎内でフリー状態になっているマリア。
もし、ブロックがない場所を掘ってしまったら。
もし、何かの拍子に犬舎のドアが開いてしまったら・・・。
もし、もし・・・。

マリアを想い、悪い想像が止まらない。
大急ぎで仕事を終え、帰宅した私が見たのは
小屋の中で寛ぐ、マリアの姿。

朝見た時と同じ場所で落ち着いて過ごしている。
ワイヤーが切れた事に気付いてない？
それとも・・・。

ドアを開け、小屋の中のマリアに近づく。

マリア。
今、私を突き飛ばして外に出る事もできたんだよ。
いいの？



この場所を「いい所だ」って思ってくれたの？
歯を折ってまで脱走しようとしたこの場所を
「自分の生きる場所だ」って認めてくれたの？

マリアは何も応えない。

いつもと同じく、尻尾を振る事なく

小屋の中からこちらを見ているだけ。

でもその瞳は、昔とは比べ物にならないくらい
穏やかで優しかった。

大事な大事な、マリア。

私と生きることを、受け入れてくれたマリア。

・・・あなたは私の宝物。



8年間を埋めるように

■ 8年間を埋めるように ■

マリアを迎えて一年が過ぎたころ
我が家は広い庭付きの一戸建てに引っ越した。
もちろん、マリアも一緒。

この引っ越しを機に、マリアの犬舎は今までより
ますます広く大きなものになった。

常に家族の気配が感じられる場所に作った
大きくて白い犬舎。

新しい住居への引っ越しに、警戒心の強いマリアは
またまた大暴れしたけど・・・大丈夫。

きつとすぐに気に入ってくれる。

ここで思いきり動き回ってね。
穴掘りだって、やって良いよ。

あ、でもその可愛い顔に傷を作るのはやめてね。
マリアは私の可愛いお姫様なんだから。

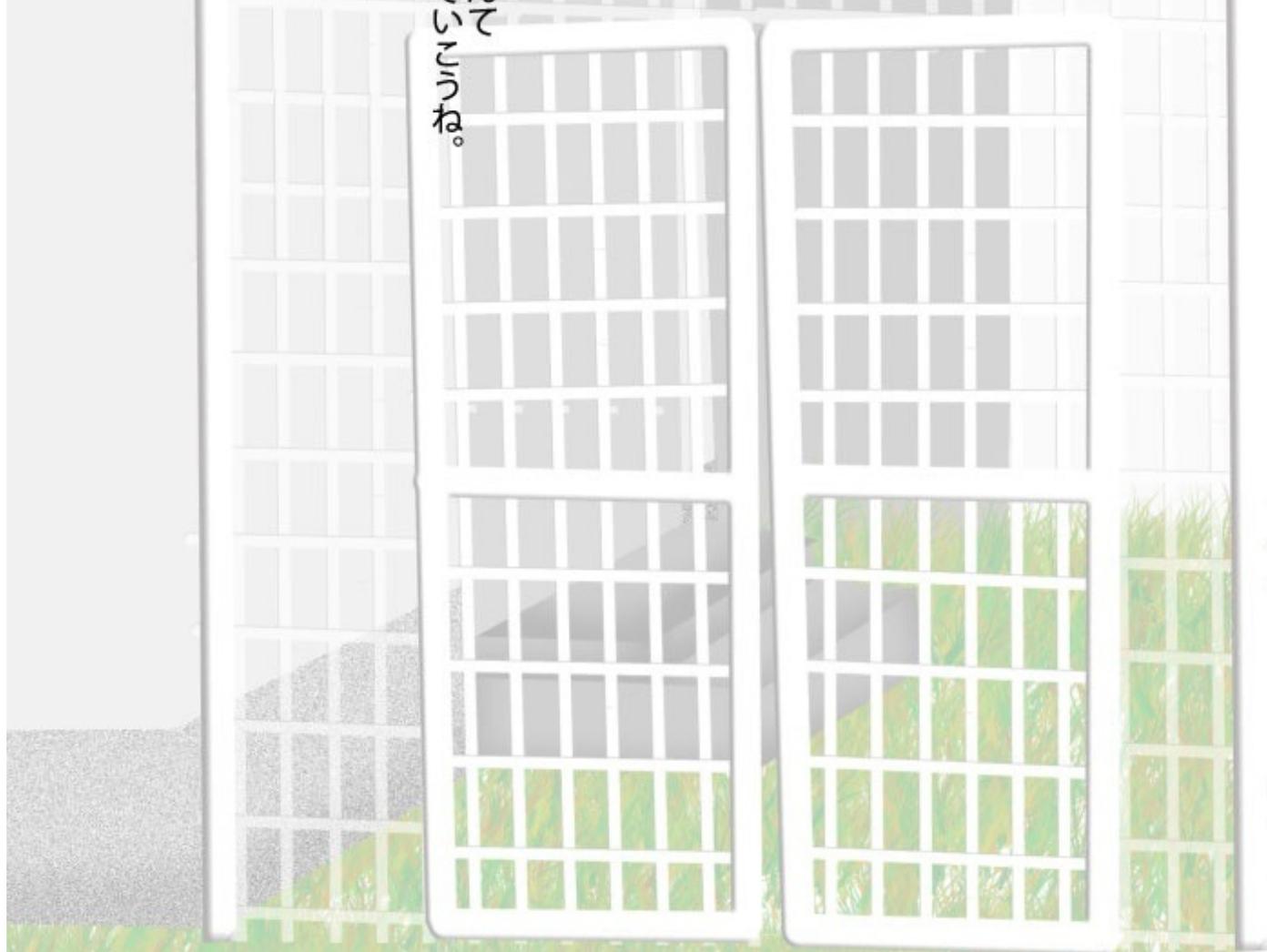
あの「死と隣り合わせ」な場所で生きていた8年間なんて
すぐに取り戻しちゃうくらい、ここで私と楽しく生きていこうね。

「あなたを絶対、幸せにするから」
マリアを保護すると心に決めた時、心からそう思った。

そしてその気持ちは、あなたを愛おしく思うにつれ
私の中で、ますます大きくなっていく。

マリア。

あなたの本当の人生は始まったばかり。
・・・始まったばかりなのよ。



■旅立ち■

私の姿を見ると、マリアが小屋から出て来てくれるようになった。尻尾を振る事はないけど落ち着いた様子で私をじっと見上げる。

「出迎えはしたものの
どうして良いか分からない・・・」

そんな感じの少し困った表情が可愛くて、愛おしくてたまらなかった。

体に触れようと私が手を伸ばしても嫌がる事無く、優しく受け入れてくれる。

そろそろ「散歩」に行けるかもしれない。私の念願だった、マリアとの散歩に。

・・・そんな事を思いはじめていたある日マリアが天国へと旅立った。

安らかな顔で、友人たちが持って来てくれた沢山の綺麗なお花に囲まれて、空へと昇っていった。私と暮らし始めて1年10か月後のことだった。



「ありがとう。」

私を捕まえた日も、あなたはそう言っ
て今と同じように泣いていた。

人間の目に触れないよう、存在そのものを隠すように生きてきた私。
いじめられても、愛おしい我が子を奪われても
抵抗もできず、ただ大声で泣くことしか出来なかった。

私にとって生きる事は、諦めの連続だった。

だけど、あなたは、
私が大声で泣けば、いつでも飛んで来てくれた。
私が多分な暴れても、逃げたり怒ったりせず
ずつと傍にいてくれた。

本当はうれしかった。
私の「声」を聞いてもらえたのは、初めてだったから。

人間が、心から信じてても良い存在なのかどうか
正直今でも分からない。

でも、最期に思えた。
この世に生まれてきて良かった……。

もしもこの次
生まれ変わることがあったら、その時は
色んなものを諦めずに生きてみたい。

何にも怯えることなく、堂々と生きたい。
そう出来る気がする。

だって私には、帰る家があるから。
「マリア」と呼んでくれる、家族がいるから。

私はもう「野良」
なんかじゃない。

……ありがとう。



マリアが残してくれたもの

■マリアが残してくれたもの■

マリアが天国に行って、数年が経つ。

野犬だった頃のマリアが命がけで産み、必死に守ろうとした子犬達は今はそれぞれ温かい御家庭に迎えられ、幸せに暮らしている。

一度、マリアが彷徨っていた地区で保護された犬達の「同窓会」を開催したことがあった。

集まったのは、同じお顔の、同じ行動をする子達ばかり。

お互いのことは覚えてなくても見ればすぐ「親族だ」と分かる子達だった。

おそらく、その親族の全ての起源であるマリア。

小さな体で、こんなに沢山の「命」をこの世に誕生させ

それぞれの家庭に愛や幸せを運んだ彼女は

やっぱり「聖母マリア」だったと改めて思う。

そして今、私の傍にはクルンとした瞳がマリアとよく似た一匹の犬がいる。

マリアの忘れ形見のジェリーだ。

ジェリーは私の愛息子として、共に人生を歩んでくれている。

そして私が所属する愛護団体のスタッフ犬として

心に傷を負った保護犬たちに「人間と共に生きる楽しさ」を教えてくれている。

「人間は怖くないよ。」

人間との生活も、悪くないでしょ。」

私が、何度も何度もマリアに伝えた言葉。

今、息子のジェリーがそれを教える姿に心が震える。

犬達の保護活動は、決して楽ではない。

肉体的にも、精神的にも行き詰まり、心が折れそうになる時もある。

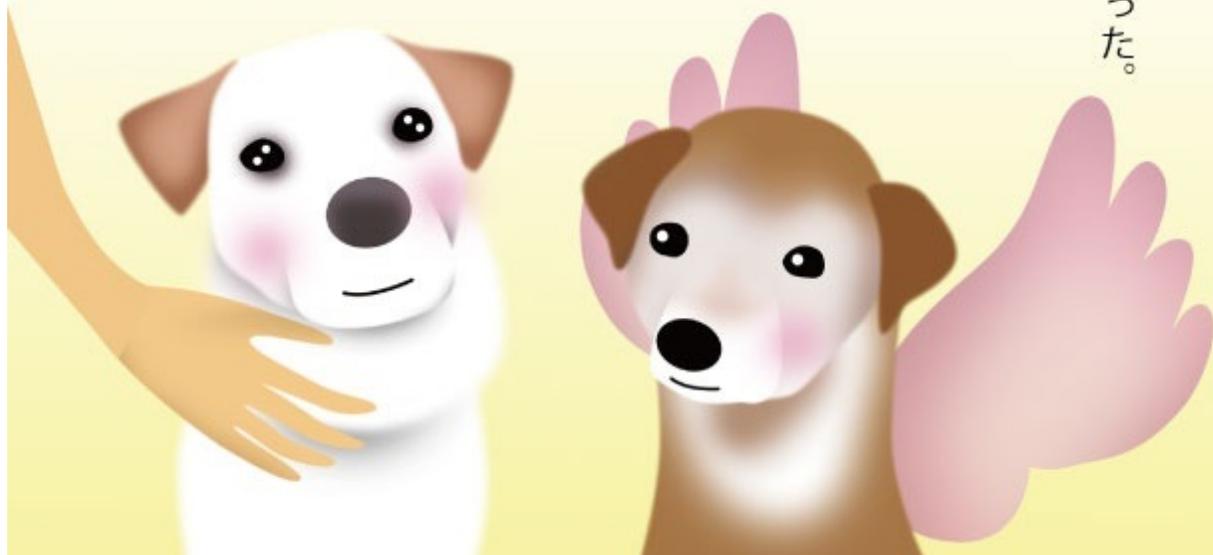
それでもこうして進めているのは、マリア。

あなたの存在があったから。

8年間、たった一人で闘い続けていたマリア。

交通事故や保健所の捕獲から身を守り、自分はガリガリに痩せ細りながらも

子犬たちを立派に育てていたその日々はどんなに過酷で、緊張の連続だったろう。



その根源である「人間」に捕らえられ
歯を折り、肉片を飛び散らかせながら脱走を
試みたマリア。

彼女にとって人間と関わる事は「死」を意味していたんだと思う。

人間は、自分たちに石を投げ、苛める存在だったから。
大事な我が子を、無下に奪っていく存在だったから。

そんな人間である私と始まった生活。

最後まで尻尾を振ってくれる事はなかったけど

私の手から、そおっと優しくオヤツを受け取る姿は
とても穏やかで可愛かった。

私を見上げる、少し困ったようなお顔が
たまらなく愛おしかった。

私はあなたに「野良犬の心」を教わった。

もっともっと、沢山の犬を救いたくなかった。

だからやっぱり、あなたに贈るのは

この言葉しか見つからない。

愛おしい、マリア。

たくさんのお愛と希望を残してくれた、聖母マリア。

この世に生まれてきてくれて、ありがとう。



■ マリアとの約束 ■

とても安らかな、そして清らかな
優しく、まるで眠っているような顔のマリア。
私はマリアの体を何度も撫で、抱き上げた。

やっとなんか……
やっとなんか、思いきりあなたに触れられる。
抱きしめられる。

マリア、大丈夫。寂しくなんかないよ。
だって、今日からはあなたを室内犬にしてあげられる。
今までよりずっと、一緒にいてあげられるから。

いい？
次に生まれてくるときは、寄り道せずに
まっすぐウチにおいで。

あなたはもう「野良」なんかじゃない。
私の、大事な大事な家族なのだから。
そのシルシに、迷子札は付けたまま見送るね。

怖いものも、悲しいことも、檻も、リードも
なにもない温かな場所です。
思いきり自由に走り回って満足したら
迷わず、ここに帰って来てね。
約束よ。

マリア、あなたの最期を看取らせてくれてありがとう。
私のそばで生き抜いてくれて、ありがとう。

この世に生まれてきてくれて、ありがとう……。



おわりに

■おわりに■

私がマリアちゃんのことを知ったキツカケは、ある動物愛護イベントで掲示されていた啓発パネルでした。

預かりボランティア「チームA」さんのブースに掲げられたそれには野犬だったマリアがちゃんがannyさんと出会い、保護され最期は人間の愛に包まれながら旅立った経緯が書かれていました。

私はそれを見て初めて

「野犬がどういう暮らしをしているのか」「どれほど深い心の傷を負っているのか」を知りました。

特に、人間に奪われる我が子の姿を目の当たりにしながら恐怖心が故に、ただ鳴き叫ぶしかなかったマリアちゃんの描写には切なさで胸が張り裂けそうになりました。ずっとずっと頭から離れませんでした。

それから一年以上が過ぎた頃、私は愛護センターから「野犬の子」であるひなを譲り受けました。

以前は何となく「こわい」というイメージを持っていた野犬を我が子に迎えようという気持ちになったのはマリアちゃんという存在があったからです。

だからマリアちゃんは、私とひなの恩人でもあるのです。

マリアちゃんのことを、もっと沢山の方に知って欲しい。彼女が精いっぱい生きて、その軌跡は私達に色んな事を教えてくれるはずだから。

ひなと暮らすようになり、その想いは日に日に強くなっていきました。

でもマリアちゃんは、よそ様の大事な子。

他人の私が、その生涯を語るのはとてもおこがましく、失礼な気がしてずっと言い出す事ができませんでした。



マリアちゃん



マリアちゃんの息子、ジェリーちゃん



幸せになったマリアちゃんの親族

そんな中、マリアちゃんのお母さんであるannyさんとメールでやり取りする機会が何度かあり、私は思い切って自分の想いを打ち明けてみました。マリアちゃんの事を書かせていただきたいと。以下、annyさんからいただいたお返事です。

「マリアのこと、書いて下さい。」

野良犬のはじまりは、ニンゲンだと。

野良犬を作るのは、ニンゲンだと。

そのことを、みんなに知ってもらいたいです。

そして、捨てられ「野良犬」と呼ばれるようになった子達の心を知って欲しいです。」

annyさんは今も

人間の身勝手で消えそうになっている小さな命を救うべく日々奮闘してらっしゃいます。

たくさんの同士、

ジェリーちゃんをはじめとする可愛いスタッフ犬達、

そして心の中にいるマリアちゃんと一緒に。

※このお話は、マリアを保護されたannyさんへの取材と当時の日記を元に、チコマが綴ったものです。物語に登場する「私」はannyさんのことを指します。

保健所や愛護センターに沢山の犬猫が収容されているのをご存知ですか？

迷子になって帰れなくなった子

うっかり脱走しちゃった子

飼い主に『もういらない!』と持ち込まれた子

・・・鉄格子の中でお迎えを待つ彼らの目は悲しみにあふれています。

そんな子達に、もう一度幸せになって欲しくて、笑って欲しくて犬猫の保護活動をやっている1匹でも多くの犬猫達が幸せになりますように・・・。

(TEAM-A annyさんのブログより)



保護犬同窓会



TEAM-A の譲渡会



annyさんの家族と預かり中の保護犬

